

イングランドにおけるトップアップ(裁量制)授業料制度の学生及び 高等教育機関への影響に関する UUK 第3回年次調査報告書について

8月12日、英国大学協会(UUK: Universities UK)は、第3回年次調査報告書「イングランドにおけるトップアップ(裁量制)授業料制度: 学生及び高等教育機関への影響の評価」(Variable tuition fees in England: assessing their impact on students and higher education institutions)を発表した。

本報告書は、2006年度にイングランドにおいて導入された、英国及びEU加盟国からのフルタイム学生に対するトップアップ(裁量制)授業料制度(※後述の「参考」を参照)の影響を評価するための基準を提供することを目的としている。また、本制度による増収をもとにした奨学金についてもあわせて調査している。本調査は3回目になるが、今回はじめて、本制度が開始された2006年度のデータが利用できるようになり、本制度の導入後の影響が分析できるようになった。

なお、本制度は、イングランドの高等教育機関における英国及びEU加盟国からのフルタイム学生を適用の対象としている。一方、EU域外の国からの留学生に対する授業料には上限がなく、英国の高等教育機関の重要な収入源になっている。

報告書中の「Summary」(p.5)と「Reflections and conclusions」(p.28)をまとめた概要以下のとおり。

(概要)

- ・利用可能なデータを見る限り、フルタイム学生に対する導入の影響は見当たらない。また、パートタイム学生については2005年度から多くの高等教育機関が授業料を大幅に引き上げたにもかかわらず、変化の兆しは見当たらない。しかし、パートタイム学生は、フルタイム学生に比べて学位取得までの期間が平均的に長いため、変化が顕著に表れるのにより時間がかかるかもしれない。
- ・フルタイム学生としての入学希望者は9%増加(2008年)。※1月15日時点で比較
- ・17歳の入学希望者は、43.9万人から47.1万人へ増加。
- ・EU加盟国からの入学希望者は6%増加。(EU域外からの入学希望者は11%増加。)
- ・英国出身のフルタイム学生の入学者数は4.3%減少(2005年度～2006年度)。
- ・ウェールズの高等教育機関を希望するウェールズ出身者が大幅に増加(2005年度～2006年度)。ウェールズでの本制度の導入が2007年度に延期されたことが影響していると思われる。ただし、ウェールズの高等教育機関はウェールズ出身の学生に対し、1,835ポンド(約40

万円)の授業料支援を行っているため、ウェールズでの制度導入以降もこの傾向は続くことが予想される。

- ・3 つの科目(医学、コンピュータ科学、歴史・哲学)は、入学者数が平均値以上に減少(2005年度～2006年度)。これらは本制度の導入によるものではなく、長期的な傾向を反映しているかもしれない。また、物理科学、工学等は、導入の影響を受けている恐れがあるが、目だった減少ではない。
- ・大半の高等教育機関は、授業料を上限の3,145ポンド(約66万円)まで引き上げ、奨学金制度の維持を図っている(2008年度)。
- ・300人以上の入学希望があった高等教育機関は7.9%増加(補正值)。
- ・民族性、社会的富裕、年齢のバランスは、依然として高度に安定しており、導入による目に見える影響はない(2004年度～2007年度)。
- ・イングランド出身学生の約75%が授業料の貸与を選択(2006年度～2007年度)。
- ・低所得家庭向け財政支援の支出は、高等教育機関とOFFA(Office For Fair Access)との協定締結時の予測を下回っている。申請資格のある学生に対して、新しい財政支援に関する情報が浸透していない影響もある。
- ・パートタイム学生の入学者数は、6.8%増加(2003年度～2006年度)。
- ・パートタイム学生の授業料は依然として実質増加している。

(参 考) 裁量制授業料制度(Top-up Tuition Fee)

裁量制授業料制度では、各高等教育機関は上限の年間3,000ポンド(約65万円)まで裁量で設定できる。授業料の支払いは、卒業後に年収が15,000ポンド(約315万円)を超えるまでは生じない。また、15,000ポンドを下回った場合は一時中止できる。なお、利息は低い。さらに、各高等教育機関は、本制度による増収分の25%以上を、低所得家庭向けの奨学金に充てることになっている。

本制度の導入に関しては議論が多く、これに関連して授業料の上限そのものを撤廃し完全に自由化するという議論がある。一例として新聞記事を以下に記す。

- ・Are top-up fees good or bad? (The Independent 2008年6月26日)

<http://www.independent.co.uk/student/student-life/finances/are-topup-fees-good-or-bad-796011.html>

※前半は本制度の紹介、後半は授業料の上限撤廃に関する意見紹介(賛成派と反対派)。

※賛成派のラメル高等教育相の意見: 大学卒業者は、Aレベル試験に合格しているものの大学に進学しなかったひとよりも将来の収入が平均的にかなり高いため、彼らに学位取得のためのコスト負担に貢献してもらうことは理に適っている。

※反対派の意見: 大学受験生が、大学の質ではなく授業料によって入学希望先を選択するインセンティブが生じる恐れがある。

(参考資料)

- No dip in demand following fees, report shows (UUKプレスリリース 2008年8月12日)
<http://www.universitiesuk.ac.uk/Newsroom/Media-Releases/Pages/MediaRelease.aspx>
- Variable tuition fees in England: assessing their impact on students and HEIs (UUKブックショップ 2008年8月)
<http://bookshop.universitiesuk.ac.uk/latest/>
- Results show dip in English and science standards (The Independent 2008年8月12日)
<http://www.independent.co.uk/news/education/education-news/results-show-dip-in-english-and-science-standards-892125.html>

(了)